駒澤地理 No.53 pp.55～72, 2017
Komazawa Journal of Geography

長崎市中島川・寺町地区におけるまちなか居住と観光資源

山口太郎*

Relationship with Living at Central Area and Tourism Resource along Nakashima River and in Teramachi Area, Nagasaki City

YAMAGUCHI Taro

眼鏡橋という観光対象で知られる，長崎市中島川・寺町地区における空間構造を分析した。観光ガイドブックでは，下町風情のあるほっとする和みというイメージで表現される同地区は，町家建築が点在しており，点在ゆえに観光対象には至らず，雰囲気を醸し出しているに過ぎない。町名の復活を成し遂げた東古川通り界隈においてのみ，町家と観光の補助的施設の両方が充実している。同地区は，中高層集合住宅も多く，日常生活のための商業施設も多い。一部を除けば，観光空間というよりも居住空間という側面が強い。実際，人口が微増しており，まちなか居住の兆しが見える。また，北側の一部には町家デザインの新築マンション，スペインバル，町家の点在による雰囲気等，居住空間としても観光空間としても楽しめるサードプレイスのような空間の可能性を確認できた。

キーワード：観光資源，町家，まちなか居住，観光空間，長崎市
Keywords: Tourism Resource, Traditional Townhouses, Living at Central Area, Tourism Space, Nagasaki City

Ⅰ．はじめに

『平成28年度版観光白書』によれば，2015年の訪日外国人旅行者数は1,974万人であり，インバウンド市場はますます拡大していくと思われる。

観光に関する地理学的研究ではこれまで，(1) 温泉観光地域，スキー集落，あるいは，町並み観光などの観光に依存した地域を事例として取り上げ，その形成過程や観光産業の機能，構造を分析し，観光地の実態把握を試みた研究，(2) 観光者の行動や流動に関する研究，(3) 文化の客体化とホスト社会の人たちに与える影響に関する研究，(4) 社会的コンテクスト（文脈）との関係性，観光地のイメージ，風景と観光，観光地のコンフリクトなど，「文化」や「空間」といった側面に注目する研究，(5) 地理的発見や交通手段の発達などを含めた旅の文化史という観点からの研究，等が行われてきた（山口 2012）。そのうち筆者は (1) の観光地の実態把握という立場から，長崎市東山手・南山手の分析を行った（山口 2016）。その前稿で示したように，観光地に対し，観光資源だけでなく土地利用や景観の悉皆調査を行うことで，観光地の地域分化を示すことが可能となる。これは，空間の面的広がりを研究対象とする地理学ならではの方法であると考える。すなわち観光地における空間特性の分析である。

飯塚ほか (2013) では，ブルガリアの農村中心地であるバンスコを事例として，建築物の外壁と観光関連施設との相関から，旧市街地とスキーリゾートを結ぶ通り沿いに，前者の模倣型である外壁による

*駒澤大学文学部地理学教室 非常勤講師，駒澤大学応用地理研究所 専門研究員

伝統的景観の創出と，後者の景観との混在による複合的な観光空間の構築が明らかにされた。太田・飯塚（2014）では，マルタ共和国マルサシュロックという漁村を事例として，施設や街区利用の分布状況から，生活関連施設が卓越する中心地区とそれらを取り囲む住居群からなる生活空間，漁港と農地からなる生産空間，マルサシュロック湾を取り囲む観光空間という空間構成が明らかにされた。片柳（2015）では，兵庫県赤穂市の旧城下町地区における景観形成を検討し，建築物の意匠や階数，駐車場の分布などから，旧侍屋敷地では景観復元，旧町人地では景観創出による景観まちづくり事業の進行を指摘している。服部ほか（2016）では，神奈川県箱根町の箱根地区・元箱根地区を事例として，土地利用と建築物用途の現地調査とGISによる分析から，箱根地区では湖岸付近に観光施設と交通施設を中心とした観光空間が形成され，元箱根地区では湖岸から近いところに観光施設，宿泊施設，交通施設が混在した観光空間が形成されていることが明らかにされた。山口（2016）では，長崎市東山手地区・南山手地区を事例として，東山手では，東側は静態的であり，西側は景観整備が行われたものの観光という点では活かしきれておらず，空間全体としては，教育機関や医療機関の多い空間であることが指摘された。また，南山手地区では，「グラバー園」，「大浦天主堂」という2大観光資源界隈が古典的観光空間であるものの，グローバルな観光空間に変容していく動き出しがみられた一方，周辺部は閑静な住宅地の環境が維持されている。これらの研究では，観光地における土地利用や景観に注目して，空間構成の差異，すなわち，地域分化の様相が示されている。

本研究では，これらの既往研究に基づき，前稿に引き続き長崎市において，眼鏡橋で知られる中島川・寺町地区を事例として，観光空間をはじめとする空間構成を示していくことを目的とする。

Ⅱ．研究対象地区の設定

1．観光ガイドブックによる眼鏡橋付近や寺町のエリア設定と場所イメージ

本研究が対象とする「中島川・寺町地区」とその周辺は，中島川に架かる「眼鏡橋」，また「興福寺」をはじめとする「寺町」，さらに風頭（かざがしら）山裾に位置する「長崎市亀山社中記念館」といった観光対象を有する地区である（図1）。表1は，本研究対象地域が各観光ガイドブック[1]において，どのようにエリア設定[2]がなされ，またどのように紹介されているのかを，冒頭ページなどの長崎市中心部の観光地を概観したページからまとめたものである。表1からわかるように，各観光ガイドブックによってエリア設定が異なる。

「マニマニ」，「ことりっぷ」，「大人旅プレミアム」，「ココミル」では眼鏡橋を中心としたエリア設定がなされているが，「たびまる」ではエリア設定名に眼鏡橋が用いられず，案内文にさえ出てこない。さらに「楽楽」では，眼鏡橋は「浜町・思案橋・丸山・銅座」という広範なエリア設定の中の一つとなり，繁華街を中心とするエリアに組み込まれている。山口（2015）によれば，眼鏡橋は観光ガイドブックでの写真掲載頻度が長崎の観光資源全体で11位となるが，まわりに観光対象が乏しいことから，他エリアと一体的に扱われることが多いと考えられる。

寺町は，「ことりっぷ」のみエリア設定名に用いられていない。その領域は「眼鏡橋界隈」に含まれている。

次に，案内文からこの地区の観光客向け場所イメージを分析する。「マニマニ」，「ことりっぷ」，「大人旅プレミアム」，「ココミル」にある「風情ある」，「下町情緒」，「ほっとする和み」という形容が特徴的である。また，「マニマニ」にある「魅力ある店」には，「ことりっぷ」にある「黒漆喰の商家」，「古民家を利用した雑貨店」などが含まれていよう。

図１　研究対象地域の位置図

表１　観光ガイドブックによる中島川・寺町地区のエリア設定と案内文

発行年	ガイドブック名	眼鏡橋や寺町を含むエリアの名称	案内文
2016	マニマニ	眼鏡橋・寺町・風頭山	眼鏡橋周辺は川沿いに魅力ある店が点在。寺町には風情ある唐寺が立ち，風頭山周辺には坂本龍馬ゆかりの史跡がある。
	ことりっぷ	眼鏡橋界隈	黒漆喰の商家，古民家を利用した雑貨店などの並ぶエリア。下町情緒が味わえます。
	大人旅プレミアム	眼鏡橋・寺町・思案橋	眼鏡橋の周辺は風情ある街並みが続き，その東には龍馬ゆかりのスポット，東南に鮮やかな唐寺が並ぶ寺町がある。買い物やグルメなら繁華街の浜町や思案橋へ。
2015	ココミル	眼鏡橋・寺町	中島川に架かる眼鏡橋界隈と，その先，風頭山の山裾にお寺が並ぶ寺町は，ほっとする和みの散策エリアです。
	たびまる	浜町・思案橋・寺町	4つのアーケードが交差する浜町は，長崎一の繁華街。大通りをはさんでその向かいにある思案橋は，居酒屋から老舗料亭まで立ち並び，食べ歩きが楽しめる。歴史に興味があるなら，坂本龍馬ゆかりのスポットや寺が点在する寺町へ足をのばそう。
	楽楽	浜町・思案橋・丸山・銅座	長崎のメインストリート，おいしいお店もたくさん。
		寺町・風頭	寺町から風頭への道は龍馬ゆかりの風情ある散策路。

（各観光ガイドブックより作成）

このように，眼鏡橋周辺や寺町は，長崎の「和華蘭（わからん）文化」のうち，「和」を担っているエリアであることがわかる。そして，その代表的な建築物は町家である。

２．研究対象地区の設定

先述の「黒漆喰の商家」や「古民家を利用した雑貨店」のような町家は，眼鏡橋周辺や寺町に比較的多く分布している。それは，魚市橋詰にあるまちぶら案内所「もてなしや」において，無料配布されているパンフレット「長崎町家」や「中島川寺町おさんぽマップ」に掲載されている。また，長崎市まちなか事業推進室では町家等を生かしたまちづくりを進めるために，「中島川・寺町地区まちなみ整備助成制度」を設け，既存の町家の維持・保全及び復元のための工事や，町家以外の建築物で町家風の外観を形成する工事の経費の一部について助成を行っている。なお，長崎市景観計画において，「中島川・寺町地区景観形成重点地区」に指定されている。

本研究では，各観光ガイドブックにおいて，さまざまなエリア設定がなされている眼鏡橋周辺，寺町，風頭山周辺の中から，以下の点を考慮し，研究対象地区を絞り込んだ。まず，坂本龍馬関連観光施設に限定される風頭山周辺を外した。また，「中島川・寺町地区まちなみ整備助成制度」は，中島川の左岸から寺町通りまでとなっているため，中島川の右岸も外した。さらに，「中島川・寺町地区まちなみ整備助成制度」の範囲ではあるが，大通りを越えて中島川から離れてしまい，かつ細長い区画でもある崇福寺周辺の一画も外した。その結果，図２で示した地区を本研究の研究対象地区とし，中島川・寺町地区とする。

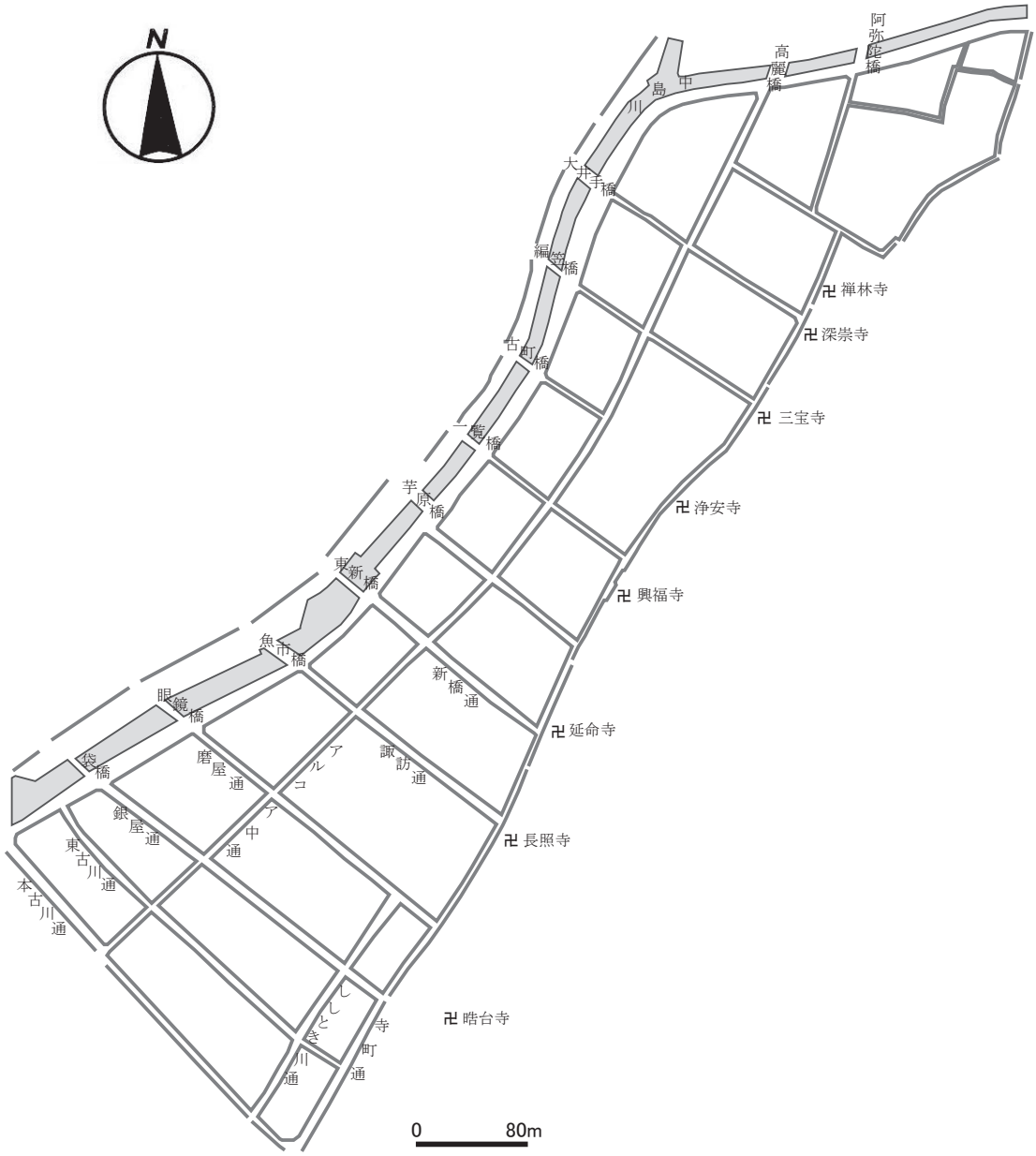


図２　研究対象地区の概略

Ⅲ．中島川・寺町地区の観光空間

１．中島川・寺町地区の観光資源

表２は，観光ガイドブックによる中島川・寺町地区の観光資源を，観光対象と観光の補助的施設別にまとめたものである。観光対象は，「眼鏡橋」と，寺町の「興福寺」，映画「解夏（げげ）」のロケ地の一つとなった「幣振坂」，345段の石段からなる「龍馬通り」，銀屋通り沿いの幕末から明治期に活躍した日本初のプロカメラマン「上野彦馬生誕地の碑」，約120年前につくられた石畳の川沿いにおける路地裏の店々が紹介されている「ししとき川通り」の６件に過ぎない。本研究の対象外とした周辺を加えても，「崇福寺」と坂本龍馬に関連する「龍馬のぶーつ像」，「長崎市亀山社中記念館」，「風頭公園」のみとなる。

観光の補助的施設となる店舗などは，物販が12軒（うち，中島川の対岸にあるのが２軒），飲食が23軒（うち，中島川の対岸にあるのが２軒）となっている。物販では，カステラやはた（凧），べっ甲のほか，雑貨店も長崎雑貨を，陶磁器店も長崎県内で生産されている波佐見焼を扱っている。飲食でも，ちゃんぽん，卓袱料理，トルコライス等，長崎観光に見合った商店が多い。カフェの中には町家建築を活かしている店舗もある。また，しととき川通りは，観光の補助的施設こそ多くないものの，小さい川の流れる路地空間にコーヒースタンドや雑貨店などが数店集まっている様子を，「マニマニ」では２ページを割いて紹介している。観光の多様化を提示している一例として捉えられよう。

これらの分布を示したのが，図３である。観光対象は，銀屋通りから磨屋通りにかけてと，寺町通りに分布している。なお，寺町通りには各観光ガイドブックには掲載されていないものの，図２で示したように研究対象地区だけで，合計８寺院が連なっている。観光の補助的施設は，ほとんどが本古川通りから諏訪通り間に分布していることがわかる。このように，観光ガイドブックによる観光空間は，中島川・寺町地区においてきわめて限定的である。それでは，地区内全体の土地利用や商業構成はどのようになっているのか，次節から説明する。

表２　中島川・寺町地区における観光資源（2016年）

観光対象		眼鏡橋		
		興福寺		
		ししとき川通り		
		龍馬通り		
		幣振坂		
		上野彦馬生誕地の地		
観光の補助的施設	物販	カステラ	2	*
		中華菓子	2	
		雑貨	2	
		陶磁器	2	
		カステラアイス	1	
		はた（凧）	1	
		べっ甲	1	*
		古着と盆栽	1	
	飲食	カフェ	9	*
		ちゃんぽん等	3	
		郷土料理	2	
		日本料理	2	
		卓袱料理	1	
		トルコライス等	1	
		フレンチ	1	
		イタリアン	1	
		とんかつ	1	
		弁当	1	
		アイス	1	

注：*は一部が研究対象地区外に位置する。
（各観光ガイドブックより作成）

２．街路ごとの建築物用途の特徴

本節では，2016年５月，７月，10月に行った現地調査の結果を中心に報告する。現地調査は，図２の研究対象地区内にある701軒の建築物を対象に，建築物用途，商業利用の場合の業種，建築物階数，町家物件の４点について行った。図４は，現地調査の結果を図示するのに用いた区画割を示した図である。本研究では，中島川・寺町地区に特徴的な「両側町」と呼ばれる町割りに合わせて区画を設定した。「両側町」は，通りに名前が付けられ，両側に町家が並び，同じ通りの両側の地域が一つの町を形成している。そして，中島川とほぼ直角に交わるタテの通り（本通り）とそれらをつなぐヨコの通り（横町）

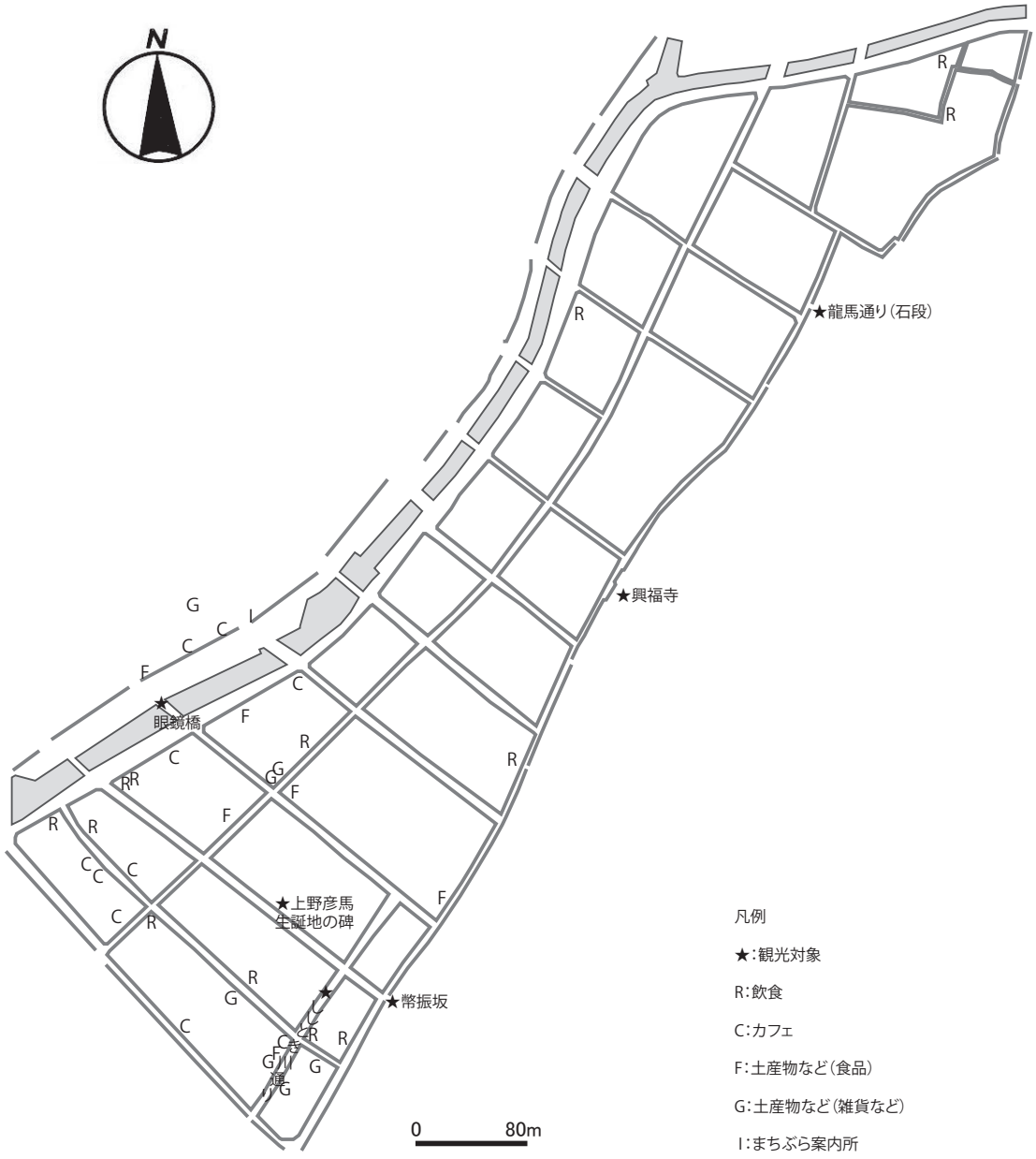


図３　中島川・寺町地区における観光資源（2016年）

（各観光ガイドブックにより作成）

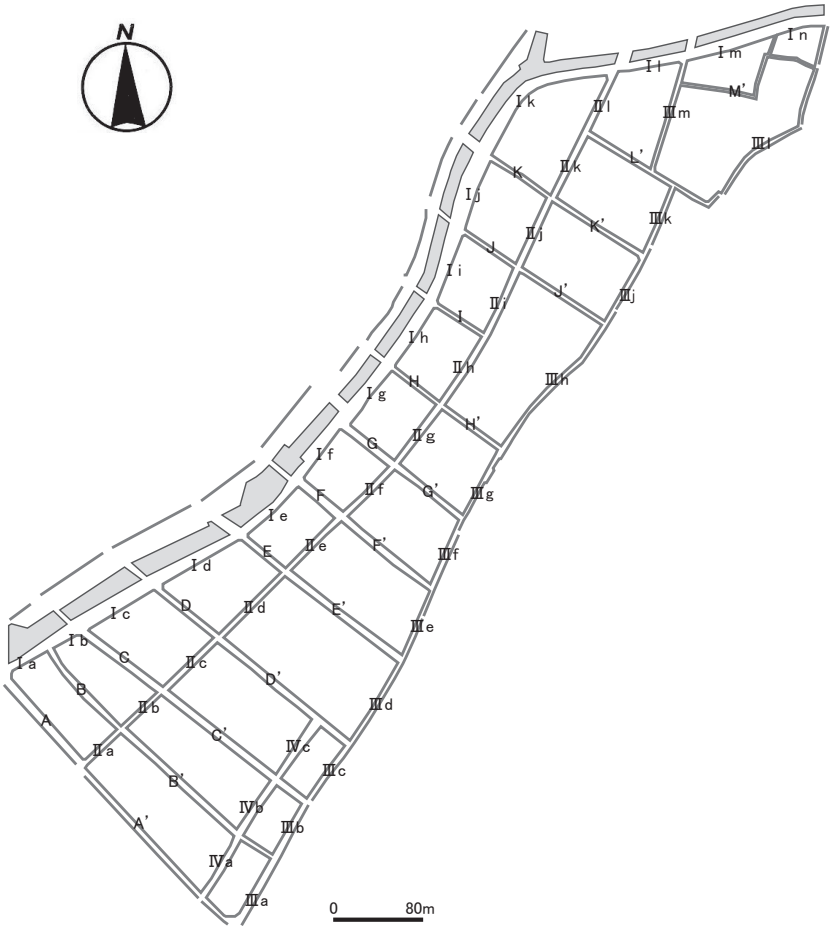


図４　研究対象地区の区画割

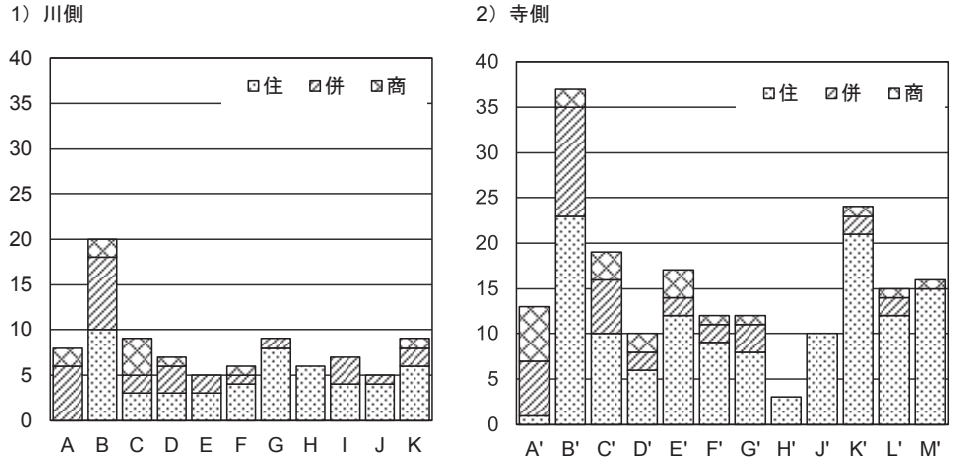
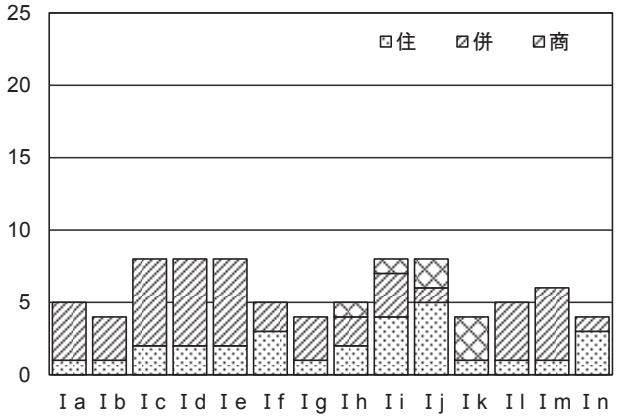


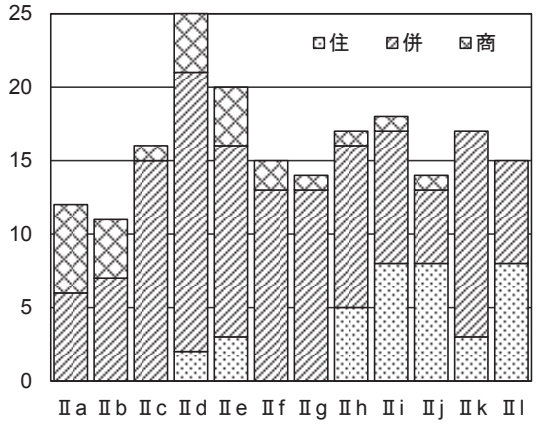
図５　中島川・寺町地区（東西方向のタテの通り）における建築物用途（2016年）

（現地調査より作成）

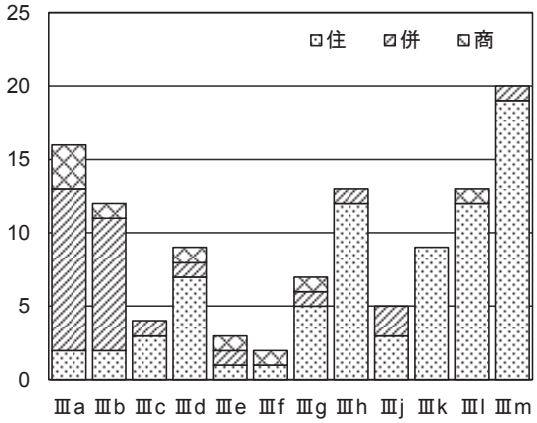
1）中島川沿い



2）アルコア中通り～



3）寺町通り



4）ししとき川通り

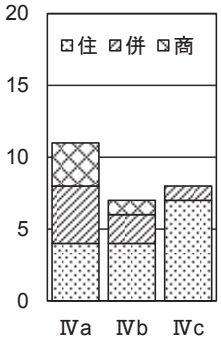


図６　中島川・寺町地区（南北方向のヨコの通り）における建築物用途（2016年）

（現地調査より作成）

で構成されている（村田 1978）。本研究では，全ての街区に対し，この発想を用いて区画化した[3)]。ただし，Ⅰa～Ⅰnの中島川沿岸と，Ⅲd～Ⅲ1の寺町通り，A～A'の本古川通りは片側のみの区画とした。なお，商店街であるⅡa～Ⅱfまでのアルコア中通りは歩行者専用道路である。また，景観計画において，B～B'区画の東古川通りは「東古川通り景観まちすじ・まちかど」，Ⅱa～Ⅱ1区画は「中通り景観まちすじ・まちかど」，Ⅲa～Ⅲk区画は「寺町通り景観まちすじ・まちかど」というゾーン設定がなされている。

ここからは，図4～図6を用いて，建築物用途の特徴を示していく。図5は，東西方向となるタテの通りを川側，寺側に分けて分析した結果を示したものである。A～A'区画となる本古川通りは，住居機能のみの建築物がほとんど見られない。この区画は，長崎市随一の中心商店街である浜町商店街のアーケードに隣接している。B～B'区画となる東古川通り，C～C'区画となる銀屋通り，D～D'区画となる磨屋通りでは「併用」や「商業」が多めである。ただし，割合で見ると，寺側は「住居」が高い。いずれにせよ，これらの区画以降，商業利用は減少し，川側ではH区画，寺側ではH'区画，J'区画において「住居」のみとなる。それ以降再び商業利用が出現するが，これらの区画も割合で見ると，「住居」が高い。併用住宅は，商業卓越区画では1階から複数階にわたって商業利用，上層階が住居利用となっていることが多く，住宅卓越区画では1階が商業，2階以上が住居となっていることが多い。

図6は，南北方向となるヨコの通りを中島川沿い，商店街の通り（アルコア中通り～），寺町通り，ししとき川通りに分けて分析した結果を示したものである。中島川沿いは，眼鏡橋に近い区画で「併用」を含め，商業利用の卓越していることがわかる。また，諏訪神社や路面電車の新大工町電停に近いⅠ1～Ⅰn区画で，再び「併用」を含めた商業利用が多くなる。Ⅱ街路となるアルコア中通りとその先Ⅱ1までの区画において，Ⅱg区画までは「併用」と「商業」を合わせた割合が高く，Ⅱh区画からは「住居」が増える。ただし，「住居」が優勢となっている区画はⅡj区画とⅡ1区画の2区画のみであり，この通り全体を通じて，一定数以上の商業利用が発達していることがわかる。「中通り景観まちすじ・まちかど」の景観形成基準において，「住宅以外の用途の建物は，1階部分を商業サービス施設とする」となっている。寺町通りにおいては，軒数の少ないⅢe，Ⅲf区画を分析対象から外すと，Ⅲa，Ⅲb区画において商業利用が多く，Ⅲc区画以降となると，住居利用が高くなる。これは，寺町通りと平行するししとき川通りでも同様の傾向である。

このように，タテの通りにおいても，ヨコの通りにおいても，多少の比率の差はあるものの，地区南部は，眼鏡橋の位置や隣接する中心商店街の影響から商業利用が多く，中部北寄りで住居利用が中心となり，北部は南部ほどではないものの，再び商業利用の比率が増すことがわかった。

3．商業構成

中島川・寺町地区は中核都市である長崎市の商業中心地である「浜町・思案橋」の周辺部にあたり，多様な商業施設が存在する。そのため，観光の補助的施設となる「食事」，「カフェ」，「土産物（雑貨等）」，「土産物（食品）」，「宿泊」の合計は26.3％に過ぎない（表3）。寺町であることから「仏具・石材・仏花」が8軒ほどあり，「彫刻看板」や「紋章」などの「製造」が6.4％を占める点は，この地区の特徴といえよう。ちなみに「製造」は，戸建ての自宅で行われていることが多い。また，「食品」，「衣料品」，「美容院・理髪店」，「教育関係」，「医療関係」など日常生活に関する業種は34.1％を占め，この地区が居住空間でもあることを示している。なお，Ⅱ街路となる「中通り景観まちすじ・まちかど」の景観形成基準では，1階部分の商業サービス施設について，「特に夜間にも賑わいのある魅力を維持していくための用途のバランスに配慮する」ことを明記している。観光空間としてだけでなく，居住空間

表３　中島川・寺町地区における商業施設の構成（2016年）

飲食	食事	61（17.0％）
	カフェ	14（3.9％）
物販	食品	36（10.1％）
	衣料品	29（8.1％）
	美術関係	18（5.0％）
	土産物（雑貨等）	10（2.8％）
	仏具・石材・仏花	8（2.2％）
	土産物（食品）	7（2.0％）
	貴金属	4（1.1％）
	その他	42（11.7％）
サービス	美容院・理髪店	13（3.6％）
	美容・健康	13（3.6％）
	教育関係	10（2.8％）
	物流	5（1.4％）
	不動産	5（1.4％）
	その他	17（4.8％）
宿泊		2（0.6％）
金融機関		1（0.3％）
医療	医院	27（7.5％）
	薬局	7（2.0％）
製造		23（6.4％）
宗教施設（寺町の寺院を除く）		3（0.8％）
公共施設		3（0.8％）
合計		358

（現地調査より作成）

として位置付けられているといえよう。

「物流」はタテの通りに多く立地している。その理由の一つに，アルコア中通りが歩行者専用道路であることが指摘できる。すなわち，地区南部ではタテの通りが流通を担うことになるのだが，眼鏡橋，東新橋，一覧橋，古町橋，編笠橋は車の通行ができない。そのため，ⅢaからⅢfに向かって一方通行である寺町通りと，魚市橋を渡るE街路の諏訪通りと芋原橋を渡るG街路の車両交通量が多い。このことと観光空間との共存は課題といえよう。

４．町家の分布

まちぶら案内所で配布されている「長崎町家」というパンフレットによると，長崎の一般的な町家は，連子（れんじ）や格子，裏の家へ続く小路（しゅうじ）などがある和風建築物であるという。パンフレットの地図では，本研究対象地区に100軒程度の町家が現存しているように示されているが，山口（2012）で指摘したように，町家建築は改築によって外観を変更していることがあり，現地での外観調査において町家とは確認できない場合が多い。そこで，現地調査の際には，町家の基準として，(1) 連子があること，(2) 格子があること，(3) 庇に瓦を用いていること，(4) 色彩に配慮していること，の４点を町家の条件とし

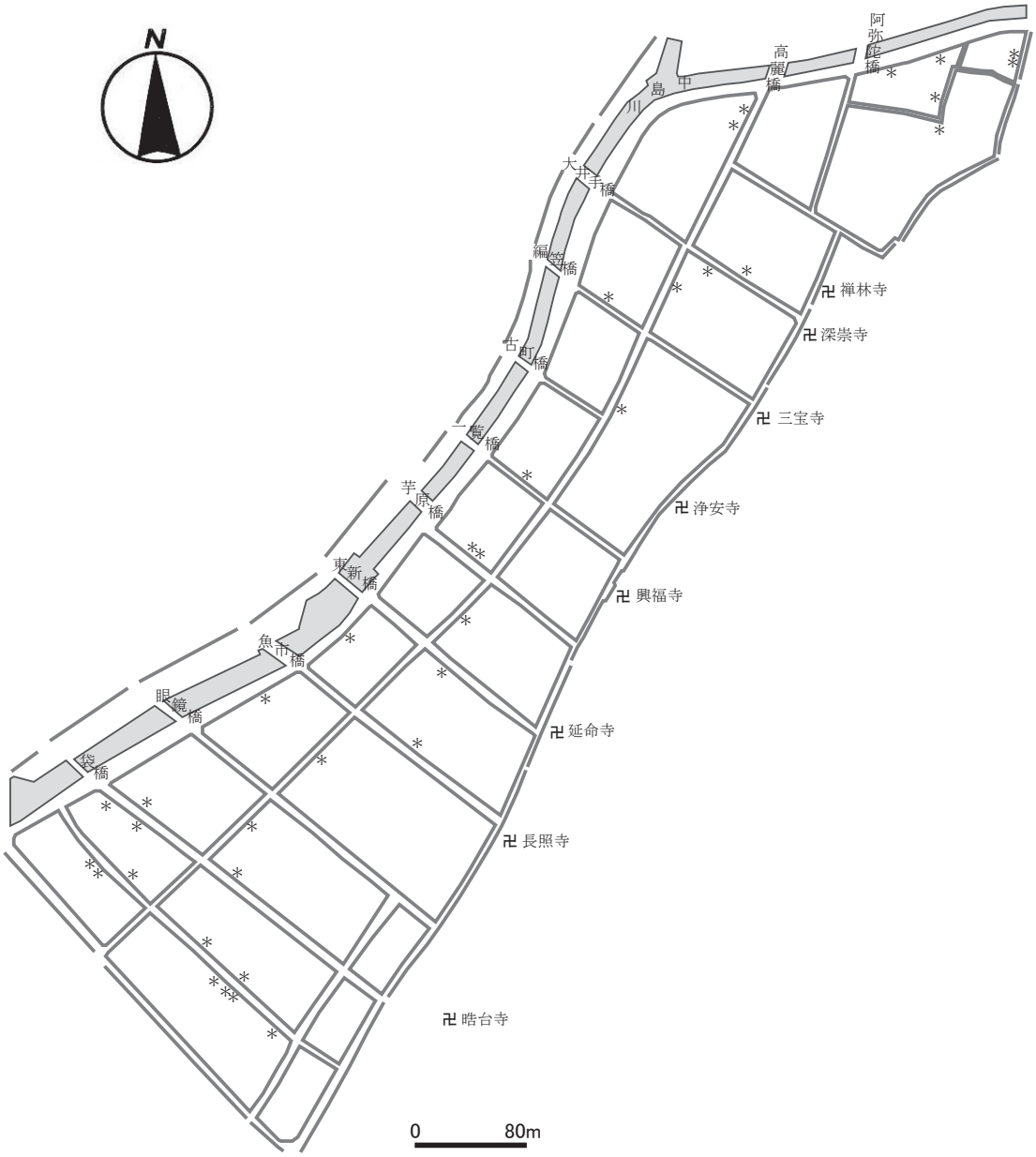


図７　中島川・寺町地区における町家の分布（2016年）

（現地調査より作成）

た。景観計画では，「道路に面する和風建築物の1，2階部分は，庇や格子等により地区の雰囲気にあった修景を行う」とある。なお，連子とは，2階の表通りに面したところに取り付けられている肘掛け窓の手すりのことである。その結果，36軒の町家が抽出された。

図7で示したように，B～B’区画となる東古川通りには町家が多く分布している。この区画の町家には雑貨店やカフェとして使われている建築物もある。修景された医院や魚屋もある。景観計画の中で，東古川通りはタテの通りで唯一，ゾーン設定がなされている[4)]。また，J～J’区画からK～K’区画のあたりや，高麗橋から阿弥陀橋あたりにかけても多く分布している。後者の区間の町家には，新築マンションにおいて町家のデザインを取り入れた建築物が含まれる。

Ⅳ．中島川・寺町地区の居住空間

1．中高層集合住宅

本章では，中島川・寺町地区の居住空間としての側面を検討する。図8は，5階以上の中高層集合住宅の分布を示したものである。1階から全て居住部になっている専用集合住宅（1階部が駐車場になっている場合も含む）のうち，5階建ては8軒，高層となる6階建ては3軒，7階建ては7軒，8階建ては7軒，9階建ては1軒，10階建ては5軒，11階は2軒，13階が1軒である。また，1階など低層部にテナントの入っている併用集合住宅のうち，5階建ては17軒，高層となる6階建ては5軒，7階建ては10軒，8階建ては6軒，9階建ては3軒，10階建ては4軒である。

図8で示したように，まずはA～A’区間の本古川通りに多い。ここは道路幅員も広く，1階のみならず中層部までテナントの建築物が多い。C～C’区間の銀屋通り，D～D’区間の磨屋通り，E～E’区間の諏訪通りにも多い。このことは，先述の町家の分布がB～B’区画の東古川通りに集中していたことと対比される。

Ⅱh～Ⅱ1にかけての区画も集中していることがわかる。この地区の南側のアルコア中通りは歩行者専用の商店街で道幅もそれほど広くないことから，必然的に中高層建築物は向かない。また，H～H’の通りより北のタテの通りでは，道幅の狭い通りが多く，分布が比較的少ない。特に併用集合住宅はⅡh～Ⅱ1のヨコの通りに限定される。これは「中通り景観まちすじ・まちかど」景観形成基準と一致する。

低層の建築物である町家が多かった中島川・寺町地区において，現在では町家が減少し，その反面，相当数の中高層集合住宅が存在しているということになる。そうすると，人口規模はどのような推移をたどってきたのだろうか。次節において説明する。

2．中島川・寺町地区の人口分布

図9は，本研究対象地区の一部である古川町，東古川町，銀屋町，諏訪町，麹屋町，八幡町の人口と年少・老年人口率の合計値を示したものである。なお，本研究対象地区には，阿弥陀橋付近の伊良林1丁目や寺町南側の鍛冶屋町が含まれるが，本研究対象地区以外の領域の方が広いため除外した。また，東古川町と銀屋町は，2007年に町名復活をなし，それ以前は古川町に含まれていた。

図9で示したように，この地区では2006年を底打ちとして，近年では人口が増加していることがわかる。なお，長崎市全体では人口は減少している。年少人口率も2009年で底打ちとなっており，いわゆる地方都市におけるまちなか居住の兆しが確認できる。高齢化は2010年に一度下がったが，比較的同じペースで高くなっている。長崎市全体では2015年において28.8％だったため，この地区はやや低めである。

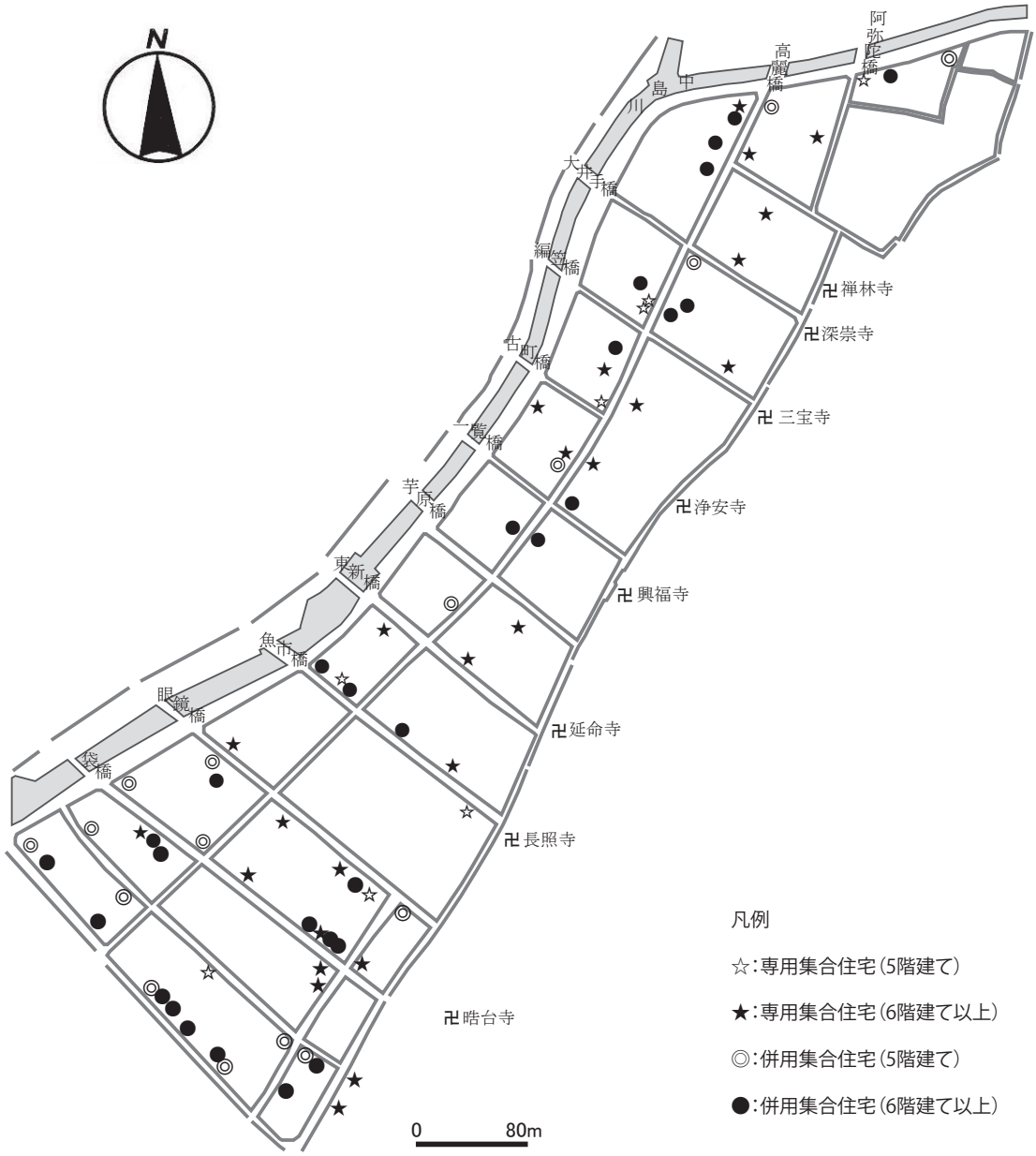


図８　中島川・寺町地区における中高層マンション等の分布（2016年）

（現地調査より作成）

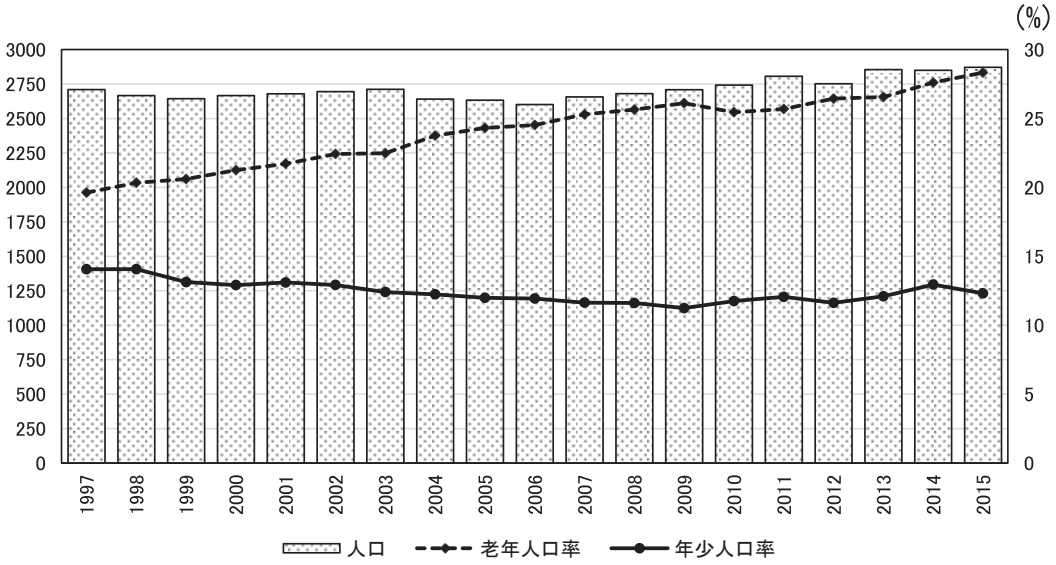


図９　旧古川町・諏訪町・麹屋町・八幡町の人口推移と年少・老年人口比率

（各年の住民基本台帳より作成）

Ⅴ．おわりに

長崎市中島川・寺町地区の空間構成は，以下のように整理できる。

観光ガイドブックに掲載されている「風情ある」，「下町情緒」，「ほっとする和み」を醸し出している要素の一つは町家である。東古川通りは，町家が特に集中している。また観光の補助的施設も多く，しかも，ししとき川通りや眼鏡橋にも比較的近い。眼鏡橋から東古川通り辺りが，中島川・寺町地区の観光空間の代表といえよう。

しかし，東古川通りを除けば，町家は点在している状態である。町家に関するガイドマップを作成していることを考えれば，歴史的町並みのような観光対象化の可能性もあろうが，町家があまり連担していない現在は，あくまで雰囲気を創出しているに過ぎない。また，町家を生かしたまちづくりを進めているのは，市のまちなか事業推進室である。そうすると，そもそも町家は地域の人々にとってのアメニティの一つと考えられないだろうか。町の景観を多様化させる一要素という位置づけである。話を観光空間に戻すと，前稿（山口 2016）でも記したように，観光資源が点在し，面的な再編成が必要であろう。

街路ごとの建築物用途の特徴は，中心的な商業地である浜町に近い方で商業利用が多く，離れるほど居住利用が多いという，地域分化としては当然の結果となった。日常生活に関する商業施設は充実しているので，商・住一体の居住空間でもあることが見い出せた。特にヨコの通りは商業軸といえる。それに対し，タテの通りは町割の都市構造や中島川石橋群と寺町を結ぶことから歴史・観光軸，また一部の通りは車両交通量の多さから物流軸といえよう。

ただし，例外的に地区北部の中島川と中通りの街路周辺において，商業利用が比較的多く見られた。また，この一帯は中高層集合住宅の分布も多い。ここには「まちなみ整備助成制度」を受けた町家のデザイン性を取り入れた新築の高層集合住宅も存在する。川沿いには観光の補助的施設となっている「ス

ペインバル」等の飲食店があり，また，数軒の町家が点在している。このような用途の多様性が，居住空間としても，観光空間としても楽しめるサードプレイス（オルデンバーグ 2013）のような空間となれば，まちづくりや地域活性化の新たな側面となるのではないだろうか。景観計画における夜間の賑わいへの配慮は，まさにこのことの裏付けとなろう。なお，ししとき川通りは対照的に昼のサードプレイスとして，その先行事例とみなすこともできよう。

中島川・寺町地区を観光の側面から検討しつつも，多くの区画が居住空間であるという実態を見い出したが，それを支えるまちなか居住は，他地区からの人口流入により活性化する。長崎市中心部でいえば，傾斜が急な斜面住宅地をはじめとする他地区からの流入の実態等を把握する必要がある。観光客に行動等の把握も必要であろう。今後の課題としたい。

本研究は，駒澤大学応用地理研究所研究費を利用して行った。

注

1）対象とした観光ガイドブックは，「マニマニ長崎」（JTBパブリッシング，2016年発行），「ことりっぷ長崎」（昭文社，2016年発行），「大人旅プレミアム」（TAC出版，2016年発行）「ココミル長崎」（JTBパブリッシング，2015年発行），「たびまる長崎」（昭文社，2015年発行），「楽楽」（JTBパブリッシング，2015年発行）である。

2）「エリア設定」という表現については，本研究の対象地区としての「中島川・寺町地区」と表現した時の「地区」と区別し，観光ガイドブックにおける本研究対象地区辺りの領域をどのように設定しているかを取り上げる際に，混同しないことを意図して用いている。ちなみに，「エリア」という表現は，各観光ガイドブックで使われていることが多かったという点で判断した。

3）タテの通り，ヨコの通りという表現は，地理学にあまりなじまないと考えるが，観光パンフレットや行政発行物でわかりやすく図解され多用されていることから，そのまま用いることにした。

4）東古川通りでは，長崎市の「まちぶらプロジェクト」の一環として，長崎県立大学国際情報学部情報メディア学科と共同研究による『和と歴史のまちぶらり東古川通り』という冊子が発行された。http://sun.ac.jp/news/22401/（最終閲覧日2017年2月13日）

文　献

飯塚　遼・有馬貴之・菊地俊夫・トゥジャロフ，ディミター　2013．ブルガリア・バンスコにおける観光発展と空間構造．地理空間6-2：155-167.

太田　慧・飯塚　遼　2014．マルタ共和国マルサシュロックにおける漁村観光と空間構成．観光科学研究8：99-106.

片柳　勉　2015．旧城下町赤穂の景観まちづくりに見る地域の記憶．地球環境研究（立正大学）17：71-81.

長崎市まちづくり部まちづくり推進室　2015．『長崎市景観計画』長崎市.

服部陽太・杉本興運・太田　慧・菊地俊夫2016．箱根・元箱根における観光と空間構成．観光科学研究9：59-66.

村田明久　1978．居住空間調査1長崎の町家．長崎総合科学大学紀要19：167-182.

山口太郎　2012．観光地理学者によるアプローチ．伊藤修一・有馬貴之・駒木伸比古・林　琢也・鈴木晃志郎編『役に立つ地理学』古今書院，51-64.

山口太郎　2015．観光ガイドブックの写真掲載頻度による長崎市の観光空間の再編成．日本観光研究学会全国大会学術論文集30：261-264.

山口太郎　2016．長崎市東山手・南山手地区における観光資源の再編成．駒澤地理52：65-80.

レイ，オルデンバーグ著・忠平美幸訳　2013.『サードプレイス―コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」―』みすず書房．Ray, Oldenburg. 1989. *The Great Good Place: Cafes, Coffee Shops, Bookstores, Bars, Hair Salons and Other Hangouts at the Heart of a Community*. Da Capo Press.

写真１　眼鏡橋
（2016年７月31日撮影）

写真４　寺町通り
（2016年７月31日撮影）

写真２　ししとき川通り
（2016年７月31日撮影）

写真５　中島川・寺町地区の町家
（2016年７月31日撮影）

写真３　タテの通りから深崇寺へのアイストップ
（2016年７月31日撮影）

写真６　町家デザインを取り入れた新築マンション
（2016年７月31日撮影）